

Abstracts in Japanese : 日本語要約

特異的言語障害(SLI)を持つ英語話者の 文法における対格主語と不完全節

アンドリュー・ラドフォード (エセックス大学)

本研究は、特異性言語障害(SLI)を持つ4歳の英語話者の対格主語について論じたものである。SLI 児の対格主語が記憶検索の失敗や不完全な代名詞パラダイム、奇態的内在格の付与、主語の主題への誤分析などから生じるという仮説に反論し、我々は、大人が完全な定形節を要求する環境においてSLI 児が不完全節を生成することが対格主語の原因であることを論証する。この分析は、大人の英語で見られる不完全節が、人称は指定されているが数は指定されていない時制辞(テンス)を含む節であるとするチョムスキー(1999)の分析と同様の分析となっている。つまり、不完全節では、指定された人称を持つ表現を時制辞の人称素性が主語位置に牽引するが、時制辞の数素性が未指定なので主語に主格を付与することができない。そこでSLI 児は、(大人のいわゆる「マッドマガジン文」と同様に)中位否定文を生成することになる。もしも普遍文法の原理で自然言語には二種類の主要な節(完全節と不完全節)が存在すると決まっていれば、子供がやるべきことは、それぞれの節が使われる環境を学習することである。したがって、この二つの節が主節に使われるという誤った仮定をSLI 児がたてたとしても不思議ではない。

(pp. 3-42)

コーパスに基づく第二言語習得研究—学習者コーパス研究の現状

投野 由紀夫 (明海大学)

本研究は近年コンピューターを利用した新しい言語研究の方法の1つとして注目を浴びているコーパス言語学的手法に基づいた第二言語習得研究の可能性を論ずる。まず過去のSLA研究における中間言語データの取り扱いを概観し、学習者コーパス構築の可能性とその重要性を説き、次に過去10年ほどで発展してきた学習者コーパス構築の現状を紹介する。さらに具体的な研究例として、筆者の構築しているJEFLL Corpus を用いた日本人英語学習者の動詞下位範疇化情報の獲得研究を紹介する。

(pp.45-76)

接続詞「だって」の使用と「心の理論」の発達

山本 多恵子 (杏林大学)
松井 智子 (国際基督教大学)
ピーター・マッキヤグ (国際基督教大学)

接続詞「だって」は、自分の意見に対する反論を他人が持っていることがわかっている状況で、自分の意見を正当化するための証拠を提示する際に用いられる。自分の意見に対する反論は、発話によって伝達された場合は典型的に話者に帰属させることができるが、発話がない状態でも推論を通して誰かの考えとして想定することができる。前者の状況での「だって」の使用には、語用論的推論能力が、後者の状況での使用には、より一般的な「心の理論(他者に信念を帰属させる能力)」が関わっていると考えられる。関連性理論(Sperber & Wilson 1986)によると、語用論的推論能力は、心の理論機構の下位モジュールであるとされる。本研究では、この考えに基づき、前者が後者に先立って発達するという仮説を立て、以下の2つの仮説を検証した。(1)心の理論が完全に発達すると言われる4歳以前の子供でも、自分の意見に対する反論が発話によって伝達された場合には、「だって」を使い自分の主張を正当化することができる。(2)しかし、相手の発話がない状態で推論によってのみ反論を想定して「だって」を使うことは、より発達した心の理論が必要であるため、4歳以下の子供には不可能である。就学以前の子供の「だって」の使用を心の理論の発達の指標とされる誤信念課題の成績と合わせて検証した結果、仮説が支持された。

(pp.81-96)

日本語と韓国語の埋め込み文の難しさ

中山 峰治 (オハイオ州立大学)
スンヒー・リー (オハイオ州立大学)
リチャード・ルイス (ミシガン大学)

本研究では、日本語と韓国語の埋め込み文理解における統辞、意味(有性無性)、音韻の類似性がどのような影響を及ぼすか調べた。特に、日本語6実験では統辞、有性無性の類似性の影響を、韓国語実験では統辞、音韻類似性の及ぼす影響を調査した。実験の結果、埋め込み文の理解にはワーキングメモリーにおける類似性をもたらす干渉が関係することが支持された。

(pp.99-119)

三者間会話における親の子どもへの行動リクエストの形態

加須屋 裕子 (文京学院大学)
上村 佳世子 (文京学院大学)

本研究では、母親父親がそれぞれ 2 人のきょうだいとの会話でどのような言語入力をしているのかを、指示語 (directives) の使用を取り上げて分析すること目的とする。2 部構成の最初は、9 人家族の母—子—兄、父—子—兄の 3 者間のおもちゃ遊びの会話データから、親の発話の量とその方向を調べ、さらに指示語の 3 つのフォームの使用頻度を調べた。次に Time1 と Time2 の指示語の使用頻度が基準以上の 6 家族を取り上げ、2 時点での比較をした。指示語の使用頻度は母父共に総発話数の約 3 分の 1 にあたり、その内訳は imperative (直接的), indirect (間接的), implied (暗示的) の順に多いことが分かった。特に、9 家族中 6 人の父親が母親より implied の使用頻度が高かった。Time1 と Time2 の比較においては、全体の傾向には大きな違いはなかったが、Time2 になってすべての母親の implied の使用頻度が上がった。質的にみても、母親の指示語の使用には、きょうだいを媒介に下の子どもに行動を促すようにしむける暗示的な形がみられ、3 歳を過ぎて認知的にも成長のみられた Time2 での母親の指示語使用の増加には意味があったことが推察された。この様に質的に異なる 3 つの種類の指示語の使用が 3 者間相互交渉における子どもの社会性スキルの獲得に効果的な分類方法であることが示唆された。

(pp.117-134)

創造物の概念化

エリック・マクレディ (テキサス大学)

過去数十年にわたり、言語学と認知科学の分野において、どのような種類の名詞類によりどのような対象物が指示されるかを決定する問題が活発に研究されている。本稿はこのような問題のうち、「家、絵画、本」のような創造物を記述する名詞表現によってどのような種類の物が指示可能か、という問題を扱っている。研究対象として、進行相の創造動詞の目的語として現れる名詞、その中でも特にこれらの名詞類の指示対象を照応指示する代名詞がどのような種類の物を指すかに焦点をあてる。調査分析の結果、このような名詞類は現実の事物も抽象的な事物も指示可能であることが示された。この結果は、これら対象物の性質に対する基本的な特徴づけを与えるものである。

(pp.135-146)

**継承言語としての日本語維持を目指して：
日英バイリンガル児童のナラティブ・ディスコース・スキル**

南 雅彦（サンフランシスコ州立大学）

ナラティブとは「時間的に連続する事柄を、時系列的・因果律的に物語ること」と定義される。母語話者、第二言語学習者を対象としたこれまでのナラティブ研究が示唆してきたのは、文構造よりさらに大きい単位での談話構造にも存在する普遍性である。しかし、こうした構造的普遍性と同時に、ナラティブ産出という作業が文化的固有性を反映していることも事実である。たとえば、異なる言語文化の背景を持つ話し手は異なる視点、感情表現、心理的枠組みを用いて異なった事柄に重点を置きながら物語るという作業を行う。本研究では、6歳から12歳までの40人の日英バイリンガル児童に「かえるくん、どこにいるの？」という文字のないひと続きの絵から成り立っている本を見せ、そこに何が描かれているかを日英両語で物語るてもらい、その物語の中で児童が使用した言語表現を比較分析した。本研究で得られた結果が全般的に示唆しているのは、日本語と英語の物語産出、さらに読み書き能力の間に存在する正の相関関係である。同時に、絵に描かれている出来事という同じ内容について表現しているにもかかわらず、それを語っているナラティブを日英の二言語で比較してみると、類似点ばかりでなくさまざまな相違点も認められた。たとえば、バイリンガル児童の物語産出における語彙数は日本語よりも英語のほうが多いことがわかった。さらに、英語での物語産出では、設定・出来事(起きた事件は何か)などナラティブの骨格をなす前景描写(時系列)に重点を置いているのに対して、日本語での物語産出では、評価(話し手や登場人物の気持ち)、すなわち感情表現などの後景(背景)描写を含む因果律に重点を置いていることがわかった。こうした相違点は、バイリンガル児童が異なる言語で物語る際にそれぞれの言語の文化的背景に即した伝達能力を個別に獲得しており、それぞれの文化に重要と思われる表現方法を用いていることを示唆している。

(pp.147-162)

中国語、ロシア語、スペイン語を母語とする バイリンガルの英語話者における両言語の受容的文法能力

ジセラ・ジア (ニューヨーク市立大学リーマン校)

ドリス・アーロンソン (ニューヨーク大学)

マイケル・ヤング (コロラド大学ボルダー校)

スーホン・チェン (コロンビア大学ティーチャーズカレッジ)

ジャック・ワグナー (ニューヨーク市立大学リーマン校)

本研究は第二言語習得における年齢による差異を調べる目的で、中国語、ロシア語、スペイン語を母語とするバイリンガルの英語話者における両言語の受容的文法能力を調査した。被験者は米国に様々な年齢で移住し、5年以上滞在した成人の中国語話者(35人)ロシア語話者(53人)スペイン語話者(55人)である。第二言語(英語)の文法能力は聞き取りによる文法性判断テストと読みによる文法性判断テストで、第一言語の能力は聞き取りによる文法性判断テストで判断し、以下のような結果が得られた。(1) アメリカへの移住年齢が若い場合、L2の能力が高く L1の能力が低いという傾向がある。つまり、移住年齢が若い学習者は L1よりも L2のほうが能力が高く、移住年齢が高い学習者はその逆のパターンを示す、という傾向がみられる。これは移住年齢が低い移民は支配的な言語をL1からL2に切り替える傾向があるのに対し、移住年齢が高い移民は L1を支配的な言語として保つ傾向があることを示唆している。よって、移住年齢が高い学習者の L2の到達レベルが低いのは脳の成熟が言語習得に課す制約のためではなく、L1がいまだに支配的であることがその理由なのではないかと思われる。(2) 移住年齢の影響は主として読みのテストではなく聞き取りのテストにおいて見られた。よって、長期的文法能力の到達度に対する移住年齢の影響は文法能力がテストされる様式によって左右されることになり、移住年齢が上がると L2到達度が下がるのは L2の文法を習得する能力が衰えるのではなく、聴覚による統語的処理能力に関連しているのではないか。(3) 3つの L1グループは、移住年齢などの重要な言語学習変数に違いはないにも関わらず、異なったレベルの L2能力を示した。すなわち、ロシア語グループはほとんど母語話者に近い能力を示し、他の2つのグループより明らかに高い能力を示したのである。これらの結果は、長期的にみた L2到達度は、これらのグループの言語的、社会的、文化的変数の違いから来るものだとすることを示唆する。

(pp.163-176)

日本語文法理解の評価： 日本語母語話者と第二言語学習者の比較によって

中川 佳子 (東海女子大学)

小山 高正 (日本女子大学)

本研究は、J.COSS 第三版を用いて、日本語母語児(L1)と第二言語学習者(L2)の日本語統語理解における困難さと、複雑な文を理解する場合の方略を検討した。被験者は、日本語母語児(L1)405人と、日本語を第二言語として学習中の中国語もしくは韓国語を母語とする学生(L2)22人を対象とした。調査の結果、両グループで理解が困難な文法項目に類似性が示された。文法20項目の通過率は、L2グループの方が全体的に低かったが、難度の低い数項目と、何度の高い数項目の順序は両グループで共通していた。20項目中最も長文の多要素結合文の通過率が高かったことから、文理解の困難度は構成要素数よりも、統語構造の複雑性に依存している可能性が示唆された。複雑な文構造に関する項目(主部修飾:左分枝型と述部修飾)は、両グループ間で困難度に違いが認められ、解答選択肢の選択状況から誤反応分析を行った結果、L2学習者は強力な語順方略を用いて文を理解する傾向があることが示唆された。

(pp.177-186)

日本語を第二言語とする年少者の関係節に関する研究

長谷川 朋美 (ハワイ大学マノア校)

子供が容易に新しい言語を習得することは一般的に言われているが、本研究では第二言語習得に適した環境にいる子供でも習得しづらい言語構造があることを報告する。

本研究では6歳以前に来日し、日本国内の公立小学校に在籍する、日本語を第二言語とする子供たち35名を被験者として、日本語関係節の口頭実験を行い、その結果とインタビューにおいて用いられた関係節の用例を分析した。被験者は、口頭日本語運用においては流暢であるにもかかわらず、特定の言語構造の運用が強要される誘出実験においては、有標の関係節が使えず、無標の主語の関係節を使う傾向があることがわかった。また、Keenan & Comrie (1977) の Noun Phrase Accessibility Hierarchy には含まれない他の関係節の産出も多く見られた。

(pp.187-202)

第二言語としての日本語における「視点」の関係するヴォイスの習得順序： 予備的研究

田中 真理（電気通信大学）

日本語の「視点」が関係するヴォイス：直接受身，間接受身，受益文の習得順序について，(a)プロダクションテスト・データと(b)OPI データを用いて検討した。(a)では，JFL の環境の英語話者と JSL の環境で日本語を学習する英語話者，韓国語話者，中国語話者，インドネシア語・マレー語話者を対象に，絵を使用した筆記のプロダクションテストを行い，含意的尺度によって分析した。(b)では，英語話者，韓国語話者，中国語話者の OPI の自然な発話データを，同じく含意的尺度を応用して分析した。その結果，学習環境や第一言語(L1)に関係なく，ヴォイスの生成順序は，一貫して，[受益文 > 直接受身 > 間接受身]であった。この順序は，以下の(1)～(3)によって説明できる。(1)「行為の受け手」を主語とする構文に対して「行為者」を主語とする構文(能動文，受益文の「てくれる」)が無標であり，本研究が対象とした L1 では行為者を主語とする構文が基本になっている。(2)直接受身は，類型論的にも統語的にも，間接受身に対して無標である。(3)受益文は，チャンクとして記憶される「て形」と授受を表す本動詞から成り，形成面においても意味面からの認識においても受身文より習得上有利である。さらに，受益文は依頼やお礼を表す定型表現にも用いられ，このような機能面からの要素も習得に貢献していると考えられる。

(p.203-224)

かなの記憶に及ぼす絵の効果： 双重収録仮説(Dual Coding Hypothesis)の視点から

松永 幸子（カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校）

本研究は、双重収録仮説(dual coding hypothesis)(Paivio, 1971, 1986, 1991; Thompson & Paivio, 1994)が提唱する人間の記憶における絵の優位性の確実性について調査したものである。本実験では、アメリカで日本語を学ぶ大学生を対象に、二種類のかな(ひらがな、カタカナ)の導入時に使用した絵と音(英語のキーワード)がこれらのかなの記憶に及ぼす短期的、および長期的効果を比較した。かなの導入法は下記の四つである。

1: 絵と音 (英語のキーワード) を組み合わせた連想法 (P+S)

2: 絵だけの連想法 (P)

3: 音だけの連想法 (S)

4: フラッシュカード (F)

実験は、**多重収録仮説**に基づいて立てた仮説 (これらの導入法は、**P+S**、**P**、**S** の順で効果をもたらす) に相違する結果となった。本稿では、この実験結果について考察し、**多重収録仮説**の修正の可能性を検討した上で、今後の研究課題を提起する。

(pp.225-238)